能「羊」をめぐる一考察

――羊のイメージに注目して――

植木朝子

はじめに

能「羊」は、室町期には上演されたものの、近世には廃曲となったと考えられている作品である。[1] 田楽でも春日若宮御祭礼に演じられた記録があり、[2] 永正二年（一五〇五）から永正十一年（一五一四）の間の成立と推定される『自家伝抄』の「古注之作者能之注文」の項には世阿弥（一三六三?～一四四三?）作とし、「江州へ遣」と注する本もある。[3] 大永四年（一五二四）成立の『能本作者註文』では「近江能」に入れている。[4] また、横道萬里雄は、一曲の中心の独演的な部分の盛り上がりに欠けること、舞踊的要素が全くないことなどから、「総体に、未完成な時代の能という匂が強い」[5]としている。

しかし、本曲は狂言「鶏猫」に挿話として取り入れられ、また、本曲のパロディーとして狂言「牛盗人」があるから、一定の流布、享受の後が見られる作品である。

本論では、能「羊」について、特に、羊という動物が持つイメージに注目して考えてみたい。

一、能「羊」の梗概と典拠

能「羊」の梗概は次の通りである。

震旦けいやう国の帝は賢王であり、世は平和に治まっていた。この帝は動物を好み、特に秘蔵の羊がいた。ところが何者かが羊を盗んだため、大いに怒った帝は、盗人を訴えたものには褒美をとらせる旨の高札を立てさせた。他国の帝に仕えていたかうはくという者が、父母に会うために久しぶりに帰ってきて高札を目にする。家に戻ると、父のかうせうは再会を喜んだ上で、帝の羊を盗み、それを

売って生活の糧としたことを打ち明ける。かうはくは黙ってそれを聞き、どんな方法でも命をつながれたことはめでたいと言って、近くの寺社参籠のために暇を乞う。かうはくはその足で、羊盗人として両親を訴える。かうせう夫婦は召しだされるが、その際には、姥を重い土車に乗せ、かうせうに引かせるよう指示される。内裏に着いた夫婦は、処刑される前に、この世に思い残すことはないかと尋ねられる。かうせうは、寺社参籠に向かった息子に一目会いたいと望むが、時間のかかることは聞けないと言われてしまう。姥は、自分たちを訴えた者の姿を一目見たいと願う。官人は、それは簡単なことだとして、かうはくの姿を見せる。驚いた夫婦は、親を訴えて死に追いやるとは、と、息子に恨みごとを言う。いよいよ夫婦が処刑される段になって、かうはくは、褒賞として自分の願いをかなえてほしい、という。処刑の後で望みを聞くという官人を制して、かうはくは両親の助命を願う。それならば、なぜ自ら両親を訴えるようなことをするのかと聞かれたかうはくは、このことがよそから訴えられれば助けることができないから、自ら訴えて、褒美に両親の助命を願うための方便だったと説明する。盗人を訴え出るのは主君への忠のため、命乞いをするのは親への孝のため、というかうはくの心に感じた帝は、夫婦の処刑を止めるように命じた。[6]

この能との関わりが指摘されているのは『論語』子路第十三の次の記事である。

葉公語孔子曰、吾黨有直躬者。其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾黨之直者、異於是。父為子隠、子為父隠。直在其中矣。[7]

葉公が正直者として紹介した、羊を盗んだ父を役所に訴え出た直躬について、孔子は、父は子どものためにその罪を隠し、子どもは父のためにその罪を隠すという、父子の庇い合いの中に、真の正直の精神がある、と述べた。このように、『論語』において、不善を成した父を訴えた直躬は、孔子によって批判されている。能「羊」もその方向性を踏襲し、親を訴えたかうはくは、その親により、孝行心のない者として非難されている。能「羊」では、その後、かうはくが褒賞として両親の助命を願うという意表をついた展開となり、かうはくの賢さが強調されている。以上のように、能「羊」は『論語』子路篇の展開と見ることができるが、登場する羊については、『論語』においては何の規定もなされていないところ、能「羊」では、帝の「御秘蔵の御羊」とされている。かうせうの罪の大きさ、事態の深刻さを強調するために、所有者として最高権力者である帝を設定したとひとまず考えられるところであるが、さらに、室町期には帝の羊を巡る事件があった。

二、称光天皇の羊

伏見宮貞成の日記『看聞日記』応永二十三年五月二十二日条には、次のような記述が見える。

抑自禁裏白羊一疋行豊ニ被預置。而行豊又三位ニ預置。引之帰参入見参。初而羊見之有興。[8]

称光天皇から世尊寺行豊に羊を預け置かれた。その羊を行豊がさらに三位（＝田向経良）に預けた。経良は預かった羊を貞成に見せる。伏見宮家の近習行豊および経良を通して、初めて羊を見た貞成は、「有興」と記す。

『看聞日記』の中で、この羊が次に話題に上るのは、応永三十年二月二十二日条である。

抑聞。禁裏羊養給。而二宮（小川）御所望之間被進之所。則被打殺云々。仍御不快種々事等風聞。不可説也。

称光天皇の飼っていた羊を、弟・小川宮が欲しがったため、兄は快く譲る。ところが、小川宮は、贈られた羊を即座に打ち殺したという。小川宮は実の妹に乱暴を働く（『看聞日記』応永二十七年正月五日条）など、常軌を逸した行動をとる人物であったが、羊の撲殺も「不可説也」と、衝撃をもって受け止められている。

さて、この小川宮は、応永三十二年二月十六日に急逝する。

小河二宮今朝辰刻。薨御云々。一時ニ瘡歟。御頓死之由使者申。迷惑無極。禁裏仙洞へ忿可被申之由申。言語道断事也。兼御病気も不聞。驚入。忿告申條本意之由返事了。二宮廿二歳也。来月可有御元服之由有其沙汰。而御頓死。人間不定今更可驚可悲々々。

特に病気とも聞いていなかったのに、二十二歳の若さで突然逝去した小川宮の死因については、その後、さまざまな憶測が飛び交い、毒殺されたとの噂もあった（同十八日条、二十日条）。

堂本正樹は、小川宮の不審死と能「羊」について、

この時になって、以前の「羊殺し」を思い出した人間も多かったであろう。珍獣羊の運命は、やがて小川宮の上に回って来たのである。……（中略）……「どんでん返しの劇」としてふれた近江能『羊』は、もしかしたらこの時の作かも知れない。[9]

と述べている。

貴重な舶来の羊を飼い、愛玩し得た天皇は限られているため、能「羊」冒頭の「帝の御秘蔵の御羊」から、称光天皇と羊の撲殺事件が連想されることも不思議ではないだろう。能「羊」は、親を裏切ったと見えた子の行動が、実はこの上ない親孝行であったという、堂本論言うところの「どんでん返し」の能であるが、帝の「御秘蔵の御羊」から忠も孝もない小川宮を連想し、不穏な結末を思い浮か

べた観客にとっては、予想を裏切る大団円に、二重の意外性を見出し、それを楽しみ得たのではなかろうか。

三、羊のイメージ――輸入の様相と疫病――

羊は舶来のものとして珍重され、古くは『日本書紀』推古天皇七年（五九九）九月条に「百済貢駱駝一匹・驢一匹・羊二頭・白雉一隻」[10]と見える。その後も、たとえば、新羅からの貢進（『日本紀略』弘仁十一年（八二〇）五月四日条「白羊四」[11]）、唐からの貢進（同・延喜三年（九〇三）十月二十日条「羊」、承平五年（九三五）九月条「羊数頭」[12]、『本朝世紀』天慶元年（九三八）七月二十一日条「羊二頭」[13]）などの記録がある。『本朝世紀』天慶二年六月四日条には、宮中で公卿たちが蔵人所の廊の柱に繋がれている二頭の羊を見物した記事があり、草を食べるところや二頭が角を突き合わせているところは牛に似ていると評している。羊の輸入はその後も、唐から（『日本紀略』長徳二年（九九六）七月十九日条「羊」[14]）、宋から（『扶桑略記』承暦元年（一〇七七）二月二十八日条「羊二頭」[15]）と続く。さらに『玉葉』文治元年（一一八五）十月八日条には、

和泉守行輔、進羊於大将、其毛白如葦毛、好食竹葉枇杷葉等云々、又食紙云々、其体太無興。[16]

とある。竹葉や枇杷葉、紙を食べることを記すが、「無興」としており、記主・兼実は羊に対して好感を持ってはいないようである。

さて、羊は珍重される一方で、悪疫流行の原因とみなされることもあった。『百練抄』承安元年（一一七一）七月二十六日条によると、平清盛が羊五頭を後白河院に献上した。しかし、同書十月条には、

近日。称羊病。貴賤上下煩病患。羊三頭在仙洞。人伝。承暦之比有此事。件羊返却之。

とあって、流行病の原因とされた羊は清盛に返されてしまった。ここで「承暦之比有此事」とされているのは、『扶桑略記』で確認することができる。承暦元年（一〇七七）二月二十八日条に、「引見大宋国商人所献羊二頭」とあり、その後、八月六日条には次のような記事が見える。

今上第一皇子敦文親王薨。年僅四歳。上自一人下庶人。莫不患赤疱瘡矣。親王公卿五位已上逝去之者多焉。今月。返遣羊二頭了。[17]

この頃、疱瘡による多くの死者が出たため、二頭の羊が返されたというから、病の原因が羊であると考えられたのだろう。

四、羊のイメージ――文芸上の把握――

第三節で見たように、珍重された羊は一方で、疫病をもたらすも

のと認識される不吉な一面をも持っていた。もともと日本に生息していなかった羊に関する文芸上の把握は、多くの場合、漢詩文や仏典を踏まえたものである。その典型的な例が、『涅槃経』三八「如因趣市歩歩近死。如牽牛羊詣於屠所」[18]を踏まえた「羊の歩み」である。これは、命の終わりが刻々と近づくことを、羊が屠所に引かれていく歩みにたとえたもので、無常の心を託す表現として広く用いられている。

和歌の例として早いのは、天徳から康保元年（九五七～九六四）頃に生まれた赤染衛門の次の歌である。

山寺にまうでたりける時、貝吹きけるを聞きてよめる　赤染衛門

けふもまた午の貝こそ吹きつなれひつじの歩み近づきぬらん

（『千載集』雑下・一二〇〇）[19]

当該歌の「午の貝」は正午を知らせる法螺貝の音。次が未の刻であることを含みながら、寿命が刻々と消えていくことを屠所に向かう羊の歩みに譬える。

以下、院政期を通して、いくつかの例が散見する。

夜さり、くるしうてうちふしたれど、寝られねば

嘆きつつはかなうすぐる日かずかなこれやひつじのあゆみなるらん

（『成尋阿闍梨母集』四八）

岡崎三位やまひにわづらひて出家のよしを聞きて訪ひつかはすとて

三とせまで君にさきだつ身なれどもまことに道に入りおくれぬる

返し

よわり行くひつじのあゆみ近ければ急ぎ入るぬる道としらなん

（『頼政集』六三三・六三四）

述懐の心を

あはれあはれひまゆくこまははやくしてひつじのあゆみのこりすくなさ

（『殷富門院大輔集』一九三）

述懐歌の中に　前大僧正慈円

極楽へまだわが心ゆきつかずひつじのあゆみしばしとどまれ

（『新古今集』釈教歌・一九三三）

もえつづく香のけぶりの時うつりひつじのあゆみけふも程なし

（『新撰和歌六帖』けぶり・四八〇・光俊）

赤染衛門や殷富門院大輔の歌には「羊」に対して「午」「駒」が詠み込まれ、言語遊戯的側面もあるが、死に向かう「羊の歩み」には不吉な感じがつきまとう。殷富門院大輔詠に見られる表現は、「羊の歩み隙の駒」の形で、人生の短さ・無常を譬える慣用句として謡曲にも散見する。

羊の歩み隙の駒、羊の歩み隙の駒、移り行くなる六つの道（能「砧」[20]）

かくて月日を送る身の、羊の歩み隙の駒、足に任せて行くほどに（能「百万」[21]）

五、能「羊」における羊

第三節では、歴史上、珍重され、時には疫病の原因とされた羊の姿を、また、第四節では、屠所に引かれていく様子から死や無常の象徴となる文芸上の羊の把握を見てきた。改めて能「羊」の詞章をたどると、羊に関して次のような記述が見える。

① 此の羊と申すに。天竺にては石となり。石王子が命に変りて候。かかる奇特成る御羊にて候を。いか成る者のとりて候やらん暮に失せ申して候。

② およそ父母の。恩徳をしる事。人間に限るのみならず。鳩子は。ねぐらに帰りても。親の宿する枝をおそれ。羔羊はひざまづいて。乳房をのむとかや。鳥類、畜類に至る迄。親子のおそれ有るぞかし。況や、人生を請けながら、など孝心のなかるらん[22]。

①は、版本には見られないが、冒頭部分で、ワキが帝の「御秘蔵の御羊」に関連して、羊の優れた点をあげ、帝の羊がいなくなったことを語る箇所である。天竺の伝説として、「石王子」の命を救った羊に関する話を紹介しているが、出典は未詳である。「石となり」は「后となり」としている本もあり、[23]「后」として「石王子」の身代わりになったと考えるほうが通じやすいようにも思われる。ただし、羊が石に変じる話は、『蒙求』「初平起石」に見えるため、その知識が「后」を「石」とする誤写を導いた可能性もあろうか。「初平起石」の話の梗概は以下の通りである。

黄初平は十五歳の頃、飼っていた羊もろとも姿を消してしまった。兄の初起は行方不明になった弟を懸命に探索したが見当たらない。四十年ほど経って、占いに優れた道士に弟の居場所を占ってもらったところ、金華山中で羊を飼っている子どもがいると告げられる。そこで初起は道士について金華山に行き、初平を見つけ出した。羊はどこかと尋ねると、初平は「近くの山の東にいる」という。初起が行ってみると、ただ白い石が無数にあるばかりだった。初起は戻ってきて、「羊など見当たらない」と言う。初平は、初起と連れ立って山の東に行き、「しっ、しっ、羊立て」と声を掛ける。すると、白い石がみな立ち上がり、数万頭の羊となった。弟の神通力を目の当たりにした初起は、そこに留まって、初平について仙術を学んだ。[24]

初平が石を羊となす様子は画題としても好まれ、雪舟や狩野元信、円山応挙などが黄初平を描いている。[25]以上、「后」と「石」の混乱

の原因として、絵画などとともに広く流布したと思しい黄初平の逸話を指摘した。

能「羊」がふれる天竺の伝説は現在のところ不明ながら、羊が身を変じることによって人を救うという話の骨格は、能「羊」の構造とも関わってくるものと思われる。一曲の冒頭で、天竺の話の引用として、羊という動物から、「（本来の）自分でないものに変わり、そのことで人を助ける」話の枠組みが示されているが、一曲を通してみると、主人公は、親を裏切る密告者に身を変じてみせたものの、実はそれは孝心から出た「変身」であり、その変身が親を救うことになっているからだ。

②は、父・かうせうが、動物でさえ親を敬うのに、と、子・かうはくの密告を非難している場面で、親を敬う子の行動の例として、子羊が跪いて乳を飲むことを挙げる。ここでは、羊が孝心ある動物として捉えられている。このことについては、白居易（七七二～八四六）編『白氏六帖』「羊」に「跪乳（羔羊有跪乳之礼、人取法焉）」と見え、[26] 菅原道真（八四五～九〇三）の『菅家文章』巻一「仲春釈奠、礼畢、王公会都堂、聴講礼記」の一節に「屈膝羊知母（膝を屈めて羊し母を知る）」[27]（羊は母の恩を知って、膝をかがめ、跪いて乳を飲む）とあり、日本でも早くから知られていた。

文安三年（一四四六）成立『塵嚢抄』の「躑躅」の項に「羊食此花。躑躅（テキチヨク）シテ而斃。故ニ云尓ト。……（中略）……羊ノ性ハ至孝ナレバ。見此花ノ赤莟。母ノ乳ト思テ。躑躅シテ折膝ヲ飲之。故ニ云尓共。此義難信用。[28]」とあって、躑躅の名の由来について、ツツジの花には毒性があって羊が食べると、歩けなくなって斃れてしまうから、あるいは、孝行心のある羊は、ツツジの赤い莟を見ると、母の乳と思い、立ち止まって膝を折ってこれを飲むからという説を紹介している。ただし後者については信用しがたい、としている。躑躅の語源説としては怪しいにしても、羊を「至孝」の性とし、膝を折って乳を飲むという把握が広く流布していたことが窺われる。

①②は、能の詞章の中にさりげなく挿入されているが、親孝行をテーマとする「どんでん返し」の能において、①②のような逸話・性質を持つ羊は、実によく選ばれた動物だと言えるのではないだろうか。

六、狂言「牛盗人」と能「羊」

先にふれたように、能「羊」のパロディーとして、狂言「牛盗人」が指摘されている。両者を比較した横道萬里雄は、「羊」と「牛」が入れ替わっているほかは全く同じで、段取りもほとんど同じとした上で、狂言は、役人に引き立てられていく場面や子と対面する場面のやりとりが写実的で、対話の中に心の動きを示す発散的

なセリフ劇・対話劇であるのに対し、能は独白により、心の動きを自分自身で見つめている求心的な歌唱劇・独白劇であるとする。[29]

さらに、前節までの考察を踏まえて言えば、能は「羊」という動物の性質を生かして作品化しているのに対し、狂言は「法皇御幸の御時御車を引く牛[30]」として、大事な牛であることは述べるものの、「牛」という動物そのものの性質を取り上げて作品に生かそうとする方向性は見られない。牛を預かっていた兵庫三郎は、牛奉行の追及に、盗んだ牛を他郷で売り、その代金で親の追善を勤めたと言い訳しており、牛を盗む行為が孝行に関連づけられてはいるが、牛そのものが孝心あるものと位置づけられているわけではない。

七、狂言「鶏猫」と能「羊」

狂言「鶏猫」も能「羊」と同様の構成で、伊予国守護人の「御秘蔵の猫[31]」を殺した藤三郎を子が訴人するが、褒美として親の命乞いをし、許されるというものである。能「羊」も狂言「牛盗人」も、シテは盗んだ動物を売って代金を得たのに対し、この「鶏猫」のシテは、動物を殺すという穏やかならぬ行為に及んでいる。しかしそれは「某が秘蔵仕る鶏を、御まへのねこ殿がくわへて御逃げ候程に、思はず知らず、そばなる枕をおつとつて、投げ打ちに仕て候へば、ねこ殿の御つふりを打ち割つて、むなしくなり申されて候程に、肝をつぶし、深々と隠して埋み申て候」という経緯であった。猫に敬語を使いながらの申し開きは滑稽で、笑いを誘う。狂言「鶏猫」では、この経緯の語りに一つの面白さがあり、猫が鶏を捕らえるという卑近なできごとは表現されているものの、猫のイメージが取り沙汰されて作品世界を規定するわけではない。

さて、狂言「鶏猫」には、藤三郎の子が親の命乞いをしたものの、受け入れられず、処刑が行われようとした時に、能「羊」の話を引いて留める場面がある。そこで故事として語られるのは次のようなものだ。

> けいやうこくの民のもの、大病をうけ、羊を服して治ると夢を見て、帝の御秘蔵の羊を盗み服して治り、息災に成りてはあれ共、帝逆鱗ましまして、高札を打たせ、尋ね給へば、勲功に親の咎を申うけんため、其子が証拠にまかりいで、親の命を申うけ、助かりたるためしとこそ申伝て有物を、

能「羊」では、かうせうは「帝の御羊を盗み取り、それを売り世路をつぎて候」と述べていたが、狂言「鶏猫」の引用では、病気を治すために羊を食べてしまったとする。売ることより衝撃的ではあるが、一方で、食べるという卑俗な行為を直接的に表現することにより、滑稽感が強まることにもなっていよう。猫が鶏を捕らえて食べることとの繋がりも生まれている。歴史的に舶来のものとして珍重

され、文芸上、不吉なイメージをまとったり、孝心の象徴と捉えられたりして、ある畏怖の対象と見られていた羊は、ここでは庶民の胃袋におさまっており、やや誇張して言えば、権威が失墜してしまっているとも考えられよう。

おわりに

能「羊」は、堂本論の言う「どんでん返しの能」として、意表をつく展開が観客の心を捉えたものと思われるが、盗まれた動物が「羊」であることは、重層的な意味を持って作品に深みを与えていた。

堂本正樹が「羊という動物のエキゾチズムも、唐物の興味を助長した筈である。狂言の『牛盗人』『鶏猫』は、現実化されているだけに、現在演る方も見る方も照れくさい[32]」と述べている通り、羊という動物は舶来のものとしてエキゾチックな趣を持っており、現実離れした雰囲気を作り出す効果があっただろう。珍重された一方、疫病の原因とみなされたり、「屠所の羊」から死を連想させるなど、不吉なイメージを持つ羊が登場するにも関わらず、めでたい結末に至る点も「どんでん返し」の面白さと言える。称光天皇の羊の事件を知る者は、不孝不忠の小川宮と孝行息子かうはくの対照を楽しみ得たであろう。さらに、詞章の中に仕組まれた、姿を変えて人を助ける天竺の羊の逸話や、羊は跪いて乳を飲む孝心ある動物であるという把握は、本曲のテーマに直結しているものであった。本曲における羊は、孝行という作品テーマに直結する面白さと、対照的なイメージによるどんでん返し（不吉さから大団円へ）との両面から、よく選ばれた動物と言えるのである。

注

① 田中允『未刊謡曲集　続十一』古典文庫　一九九三年　解説による。
② 高野辰之『新訂増補　日本歌謡史』春秋社　一九三八年　による。
③ 西尾実・田中允・金井清光・池田広司編著『国語国文学研究史大成8　謡曲　狂言』三省堂　一九六一年　による。
④ 注③書による。
⑤ 横道萬里雄「能と狂言」（『国文学解釈と鑑賞』第一八巻第八号　一九五三年八月）。
⑥ 芳賀矢一・佐佐木信綱編『校註謡曲叢書　第三巻』博文館　一九一五年　および　注①書を参照した。
⑦ 吉田賢抗『新釈漢文大系　論語』明治書院　一九六一年　による。
⑧ 続群書類従　補遺二『看聞御記　上』続群書類従完成会　一九九九年〈訂正三版〉による。
⑨ 堂本正樹『世阿弥』劇書房　一九八六年。
⑩ 小島憲之他校注・訳『新編日本古典文学全集　日本書紀②』小学館　一九九六年　による。
⑪ 新訂増補国史大系第十巻『日本紀略　前篇』吉川弘文館　一九六五年　による。

⑫ 新訂増補国史大系第十一巻『日本紀略　後篇・百錬抄』吉川弘文館　一九六五年　による。
⑬ 新訂増補国史大系第九巻『本朝世紀』吉川弘文館　一九六四年　による。
⑭ 注⑫書による。
⑮ 新訂増補国史大系第十二巻『扶桑略記・帝王編年記』吉川弘文館　一九六五年　による。
⑯ 国書刊行会『玉葉』第三　名著刊行会　一九七一年　による。
⑰ 注⑮書による。
⑱『大正新修大蔵経　第十二巻　宝積部下　涅槃部全』大正新修大蔵経刊行会　一九六七年〈再刊〉による。
⑲『新編国歌大観』角川書店　により、一部表記を改めた。和歌の引用は以下、同じ。
⑳ 小山弘志　佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集　謡曲集②』小学館　一九九八年。
㉑ 注⑳書による。
㉒ 注①書所収福王流系異本による。金剛流系異本もほぼ同じ。
㉓ 注①書校合による。
㉔ 早川光三郎『新釈漢文大系　蒙求』明治書院　一九七三年　による。
㉕ 金井紫雲編『東洋書題綜覧』歴史図書社　一九七五年　による。
㉖ 神鷹徳治・山口謡司解題『古典研究会叢書　漢籍之部　第四十二巻　白氏六帖事類集三』汲古書院　二〇一二年　による。
㉗ 川口久雄校注　日本古典文学大系『菅家文章　菅家後集』岩波書店　一九六六年　による。
㉘ 覆刻日本古典全集『塵嚢抄』現代思潮社　一九七七年　による。
㉙ 注⑤論文。
㉚ 野々村戒三・安藤常次郎『狂言集成』春陽堂　一九三一年　による。
㉛ 池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本　狂言集の研究　本文篇下』表現社　一九八三年　による。
㉜ 堂本正樹「番外曲水脈（十一）機智の能Ⅳ『羊』」（『能楽タイムズ』第三三七号　一九八〇年四月）。